

第1章 はじめに(計画策定の必要性)

(1) 計画策定の意義と目的

京都府では、平成16年5月に、60年ぶりの地方機関再編に伴い、地域ニーズを的確に捉え迅速に対応するために、地方振興局、保健所、土木事務所及び地域農業改良普及センターを広域再編し、専門的な支援機能を備えた「広域振興局」を設置するとともに、現地現場主義の観点から、それぞれの地域特性に応じた地域振興を進めてきたところです。

京都府南丹広域振興局においては、亀岡市、南丹市及び京丹波町の管内市町や関係団体等と連携を図りながら、地域の歴史的、文化的、地理的条件を最大限にいかした地域づくりを進めていくために、平成17年3月に「南丹地域づくりの提案書」、平成23年1月に「明日の京都丹波ビジョン」(南丹地域振興計画)を策定し、その実現に取り組んできました。

京都府政の基本指針となる「明日の京都」は、変化の激しい時代にも柔軟かつ機動的に様々な課題に対応できるよう、いつの時代も変わることのない府政運営の基本理念や原則等を示す「基本条例」、めざす将来の京都府社会の姿を示す「長期ビジョン」、府域全体を考えながらこれからの京都づくりの戦略をまとめた「中期計画」に加えて、それぞれの地域が有する特色ある資源をいかす「地域振興計画」で構成されています。

現在、我が国では、少子高齢化の進展、若年者層の人口減少、いわゆる限界集落の発生等時代の変化とともに様々な問題が出てきています。また、台風や近年多発する局地的豪雨をはじめとする自然災害、鳥インフルエンザの発生、東日本大震災以降の原子力災害への備え等、時代は大きな転換期を迎えています。

一方、ここ「京都丹波」においては、高速交通ネットワークの整備、専用球技場である京都スタジアム(仮称)、丹波自然運動公園の京都トレーニングセンター(仮称)の整備、新規国定公園の指定に向けた取組等、交流や賑わいの基盤が整いつつあります。特に、「京都第二外環状道路(にそと)」開通による京阪神都市圏とのアクセスの飛躍的な向上はもとより、京都縦貫自動車道路の全線開通により京都丹波が全国とつながることは、京都丹波の発展にとって大きな起爆剤となります。

「今、時代は京都丹波」です。

大変化の時代を捉え、今ある地域資源と新たな交流基盤をいかしつつ、中長期的な視点を持って、大幅に計画を見直すことといたしました。

このたび改定しました「京都丹波ビジョン」は、長期ビジョンでめざす京都府社会の実現に向け、地域の資源や特性をいかした地域振興をさらに推進するものであり、「基本条例」や「長期ビジョン」、「中期計画」との整合性を図りながら、今後(平成27年4月から平成31年3月まで)の施策展開の方向性を示しています。

「京都丹波ビジョン」の実現に向けて大切なことは、亀岡市、南丹市及び京丹波町の地元自治体をはじめ、関係団体との連携・協力はもちろんですが、このビジョンが示す地域の将来像を、地域の皆さん一人ひとりに、共感・共有していただき、その実現に向けて、「京都丹波」全体で取り組んでいくことです。

京都丹波ビジョンでは、「森の京都」の中核をなす「京都丹波」が持つ豊かな自然、食材や農林産物、伝統ある文化等の地域資源と交流基盤を最大限にいかし、地域のあらゆる人や団体の力を結集した取組を進め、「京都丹波の資源をいかす 交流・活力の森の京都」実現のため、この地域ならではの先進的な取組を展開していきます。

なお、本ビジョンに取り上げていない多くの課題についても、上記「中期計画」に基づき取り組んでいくこととしています。

(2)計画の特徴

■ 地域の皆さんとともに共有し一緒にって取り組み、実現する計画です。

すべての人々にとって、安心・安全で暮らしやすい社会を形成することが行政に課せられた大きな課題であることはもちろんですが、この課題は、南丹広域振興局をはじめとする行政の力だけでは解決できません。地域の皆さんが住んでよかったと実感できる地域をつくっていくためには、明確に設定された「めざす地域の姿」の実現に向けて、地域の皆さんが、手に手を取り合って、自ら汗をかいていただくことも必要になってきますし、そこから行政と地域の皆さんとの協働という新たな形での“きずな”を結ぶことも重要になってきます。

一人ひとりが相互に相手の立場や思いを理解しつつ共に連携・協力しながら、設定された「めざす地域の姿」に向けて、自らの地域のことは自らが責任を持って、行政と一緒にって取り組んでいくという意味と行動力が求められています。まさしく様々な主体が連携しながら地域全体で取り組んでいくことなくして、今後の地域振興を強力に推進していくことはできません。

人と人とのつながり、地域と地域との結び付き、活動団体間の交流、都市と農山村との交流、行政と住民との協働等、多様なネットワークにより地域のきずなを築き、深めることによって、「京都丹波^{たから}の資源をいかす 交流・活力の森の京都」を進めていきます。

■ 「京都丹波」を、地域を象徴するブランドとして掲げた計画です。

この地域のすばらしさを地域内外に伝えるためには、地域の一体性を高め、あらゆる人・団体相互の連携を深めることによって地域全体の力を結集することが大切です。観光戦略や産業・農林業振興、社会基盤整備等の分野において、地域全体としてのスケールメリットを最大限いかした取組を展開し、この地域が持つ魅力を見つめ直し、新たな魅力として全国、全世界にPRしていく必要があると考えています。このため、この地域全体の新たな魅力を伝える共通の言葉として、この「京都丹波ビジョン」では、「京都丹波」という言葉を使用し、「京都丹波ブランド」を確立して発信していこうという戦略目標を提案しています。

この「京都丹波」という名称には、地理的な意味合いだけでなく、歴史や文化、自然、農作物等、「京都」と「丹波」の良さを併せ持つ強みをいかして「活力があり魅力にあふれ、次世代を担う若者が夢と誇りを持ち、だれもが住んでみたくなるような地域づくり」を進めたいという強い思いが込められています。

このビジョンにおいて掲げた「京都丹波」という名称の浸透を進め、地域のブランドとしての確立に努めるとともに、公の機関や組織の名称にもこの言葉が使われていくような環境づくりを行っていきたいと考えています。



■ 平成31年3月末までの具体的な取組を示した計画です。

京都丹波ビジョンでは、5つの分野で、どのように具体的な取組を進めるかについて、数値目標も掲げながら示しました。これは、皆さんに取組の進捗状況を分かりやすく知っていただくとともに、南丹広域振興局の果たすべき役割と責任を明確にしようという決意の表れでもあります。

■ 社会環境の変化やPDCAサイクルを意識した「進化する計画」です。

京都丹波ビジョンは、今後10年から20年先の京都丹波地域はこんな地域であってほしいとだれもが願うような「めざす地域の姿」を描きながら策定した計画です。

このビジョンでは、5つの分野において、具体的な取組を提示していますが、普遍的なものではありません。目まぐるしく変化する現代社会においては、その時々課題に迅速、的確かつ柔軟に対応した施策を展開することが必要です。

このため、社会環境の変化に即応する、より具体的かつ詳細な取組については、様々な機会を通じて、地域の皆さんの御意見をお聞きしながら、毎年設定する南丹広域振興局の「運営目標」や地域戦略予算に反映させて対応していきます。

また、「運営目標」を通じて、「目標の設定」(Plan)・「実施」(Do)・「評価」(Check)・「見直し」(Action)というPDCAサイクルにより、絶えずこのビジョンを点検しながら、「進化」させていきます。

